館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第52集

館林市内遺跡発掘調査報告書

―平成 26 年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査―

咄戸沼遺跡(平26地点)

北近藤第二地点遺跡(平26地点)

笹原遺跡(平26地点)

2014 館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第52集

館林市内遺跡発掘調査報告書

―平成 26 年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査―

咄戸沼遺跡(平 26 地点) 北近藤第二地点遺跡(平 26 地点) 笹原遺跡(平 26 地点)

> 2014 館林市教育委員会

例 言

- 1. 本書は、平成26年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助金、群馬県文化財保存事業費補助金を受けて実施した館林市内における埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2. 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき以下のとおりである。なお、平成26年度は「間掘1遺跡」においても発掘調査が実施(平成27年2月1日~2月28日)されているが、報告は平成27年度以降を予定している。

地点名は、平成26年度の調査であることから、「平26地点」とする。

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体者 館林市教育委員会

担 当 課 文化振興課文化財係

調査組織 教育長 橋本 文夫

教育次長 坂本 敏広 文化振興課長 岡屋 英治

文化財係長 石崎 治

係長代理阿部 弥生主任田沼 あゆみ主任田沼 美樹

 主事
 奈良 純一(担当)

 主事補
 金子 陽祐(副担当)

4. 調查作業員·整理作業員

池 下 寛 人 久保田 憲 司 小 島 鉄 男 阪 口 丈 夫 杉 田 和 実 髙 野 愛 寺 嶋 美 雪 西 谷 義 信 根 岸 良 子 橋 本 二三夫原 田 和 沙 久 田 進 前 田 清 美 三 橋 瑞 江 渡 邊 正 敏 (50 音順敬称略)

- 5. 出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。
- 6. 本書の編集・執筆については、奈良が中心となり行った。
- 7. 遺物の実測及びその他の図版の作成は、奈良、金子、池下、根岸、原田、前田、三橋で行った。
- 8. 調査の実施及び本書刊行にあたり、下記の諸氏諸機関のご協力を頂いた。ここに記して感謝申しあげる。(順不同、敬称略)

地権者各位 群馬県教育委員会事務局文化財保護課 (公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 館林市都市建設部都市計画課・道路河川課 館林市環境水道部水道課・下水道課 館林市農業委員会 館林市史編さんセンター

凡 例

- 1. 本書における挿図の縮尺は、図中に記した。
- 2. 遺跡位置図は、館林市都市計画図 (S=1/2500) を用いた。なお遺跡位置図中のスクリーントーン 遺跡地、 は調査地を示している。
- 3. 土層断面及び出土遺物の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版土色帖」に従った。一部、調査担当者の目視による判断も含まれる。

参考文献

本書を作成するにあたり以下の文献を参考にした。

館林市教育委員会 『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集~第49集

館林市教育委員会 『館林市特別編第4巻 館林城と中近世の遺跡』2010

館林市教育委員会 『館林市資料編第1巻 館林の遺跡と古代史』2011

館林市教育委員会 『館林市双書第4巻』 1974

(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 『群馬の遺跡7 中世〜近代』 2005

目 次

例 言 凡 例 参考文献 目 次 挿図目次 写真図版目次 第1章 館林市の環境・・・・・・・ 1. 地理的環境・・・・・・・・ 2. 歴史的環境・・・・・・・・ 1. 咄戸沼遺跡(平 26 地点)・・・・ 2. 北近藤第二地点遺跡(平 26 地点)。											:	1 1~2 3~10 3~5 6~8
写真図版 報告書抄録	挿	図	矛	₹	=	次	8					

館林市の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

館林市の地形概念図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

平成26年度調査遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

咄戸沼遺跡(平 26 地点)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

咄戸沼遺跡(平26地点)トレンチ配置図、基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・4

咄戸沼遺跡(平 26 地点)出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・ 5

北近藤第二地点遺跡 (平 26 地点)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6 北近藤第二地点遺跡 (平 26 地点)トレンチ配置図、基本土層・・・・・・・・・・・・・・7

北近藤第二地点遺跡(平 26 地点)出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・8

第1図

第2図

第3図

第4図

第5図

第6図 第7図

第8図

第9図

写真図版

咄戸沼遺跡(平26地点)

- 1-1 調査地全景
- 1-2 土木重機による掘削
- 1-3 1 T (東から)
- 1-4 2 T (東から)
- 1-5 2 T (西から)
- 1-6 2 T 2 土坑 (西から)
- 2-1 1 T断面(北から)
- 2-2 2 T断面(北から)
- 2-3 2 T断面② (北から)

北近藤第二地点遺跡(平26地点)

- 2-4 調査地全景
- 2-5 土木重機による掘削
- 3-1 1T (東から)
- 3-2 2 T (東から)
- 3-3 3 T (東から)
- 3-4 4 T (南から)
- 3-5 2 T内遺構 (南から)
- 3-6 3 T~4 T内1溝(東から)
- 3-7 3 T内2溝(南から)
- 4-1 3 T断面(南から)
- 4-2 4 T断面(東から)
- 4-3 2 T遺構内断面(北から)

笹原遺跡 (平26地点)

- 4-4 調査地全景
- 4-5 土木重機による掘削
- 5-1 1 T (東から)
- 5-2 1 T (西から)
- 5-3 2 T (西から)
- 5-4 3 T (西から)
- 5-5 4 T (西から)
- 5-6 1 T内1溝(西から)
- 5-7 3 T内井戸(南から)
- 6-1 1 T断面全体(東から)
- 6-2 3 T断面全体(東から)
- 6-3 1 T断面(南から)
- 6-4 2 T断面(南から)
- 6-5 3 T断面(南から)
- 6-6 4 T断面(南から)

出土遺物写真

第1章 館林市の環境

地理的環境 1.



第1図 館林市の位置

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口 約8万人の都市である。市域は東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に 長く、総面積は約60k m²である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東 は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和 町の南には利根川が東流し、群馬県一埼玉県の県境となっている。県 庁所在地の前橋市までは約50km、東京(台東区浅草)へは約65kmの 距離にあり、首都圏との結びつきも強い。

群馬県東南部は、「邑楽・館林」地域と呼ばれ、県内では低地に位置 している。館林市の標高は、15m台(大島町東部)から33m台(高根 町)であり、おおむね平坦であるといえる。本市の地形を概観すると、 「低台地」と「低地帯」に分けることができる。市域中央部に「低台 地」が東西に延びるように所在し、その周辺に「低地帯」が広がる。

この「低台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地であり、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣 接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根に至る台地の北側に沿って、日本最古の砂丘の一つ である埋没河畔砂丘が走っており、本市最高標高点はこの上にある。

「低地帯」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地である。台地北側の低地帯には、旧河道、 微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こ うした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地 面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は、沖積低地から延 びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川及 び城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、他にも茂林寺沼、蛇沼、 近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴の一つとなっている。

歴史的環境 2.

館林市内に所在する遺跡は、145ヶ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』(市内遺跡詳細分布調査報告書) には、そのうちの144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡 3 遺跡、縄文時代の遺跡 13 遺跡 (縄文土器のみ採取できた遺跡)、弥生時代の遺跡は0 (弥生 時代の遺物を採取できた遺跡2遺跡)、古墳時代~平安時代の遺跡(土師器の出土した遺跡)96 遺跡(うち縄文時 代の遺物も採取できる遺跡は23 遺跡)、古墳は17 遺跡(古墳総数25 基)、中世生産址1 遺跡、中世城館址12 遺跡、 近世城館址2遺跡である。(ただし、複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考えられる時代 でまとめたものである。)

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。館林市内に所在する遺跡の時代 的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のようになる。

≪旧石器時代≫

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈 と地元で呼ばれる内陸河畔砂丘(自然堤防)上に、その多くが確認されている。

この時代になると、遺跡数が増えるとともに洪積台地上に営まれるようになる。前期や中期の遺跡は、池沼や谷 地を望む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。後期以降には遺跡数は減少し、その所在は、台地の斜面か ら微高地に移る傾向がある。後・晩期の包含層等は低地(沖積地)におよぶ。

≪弥牛時代≫

弥生時代の遺跡として確認されたものはないが、微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。 ≪古墳時代≫

前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在することが多く、この傾向は、弥生 時代の遺物散布に似ている。中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦面 へと移行する。後期には、遺跡数は増大し、台地上の平坦部に所在する場合が多い。墳墓としての古墳は、25 基が 残存している。古墳群が2ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心 とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが谷や谷地等をみおろす洪積台地上に所 在している。

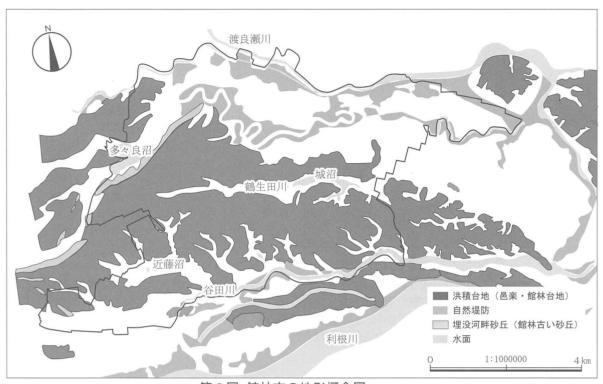
≪奈良・平安時代≫

この時代の遺跡は急増する。台地の内部や全面で遺物の採取ができることから、この時代以降は台地上に普遍的

に集落等が営まれてきたことを示唆している。

《中世·近世》

この時代の城館址については、伝説的な要素が多く実体ははっきりしないが、中世末には館林城が築かれ、近世には館林城を中心として城下町が形成された。



第2図 館林市の地形概念図



第3図 平成26年度 調査遺跡の位置

第2章 確認調査の概要

1. 咄戸沼遺跡(平成26地点)



第4図 咄戸沼遺跡 (1:2500)

所 在 地 館林市堀工町字咄戸沼

723番2

調査原因 個人住宅

調査期間 平成26年6月17日~

6月21日

調査面積 約24 m²

(1)遺跡と周辺の環境

咄戸沼遺跡は市街地の南方、東武伊勢崎 線茂林寺前駅から東に約1kmの洪積台地 上に位置する。邑楽・館林台地の南部にあ たり、遺跡の西方には群馬県指定天然記念 物「茂林寺沼及び低地湿原」が存する。周 辺は住宅用地と農地とが混在して利用さ れている。遺跡範囲北側では住宅用地、南 側の低地では稲作を中心とする農地とし ての利用が主となる。

本遺跡ではこれまでに3回(平成14・17・19年度)の発掘調査が行われている。道路改良工事に伴って行われた 平成17年度の調査では縄文時代中期の土器が大量に出土した。本遺跡全体の出土遺物も縄文時代の遺物が主となっ ている。本遺跡ではこれまでの調査成果から、範囲南部(平成14・19年度調査)で遺物確認量が少なく、範囲北部 (同17年度調査)では遺物確認量が多くなる傾向が見られる。これは、北から南に向かって標高が下がる本遺跡の 地形的な特徴の影響によるものと考えられる。

(2)調査の概要

咄戸沼遺跡(平 26 地点)の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ東西に 2本のトレンチを設定した。土木 重機により表土を排除し、その後、土層断面の観察を行ないつつ人力で関東ローム層まで掘り下げ、遺構・遺物の 検出を行なった。平 26 地点は遺跡範囲北部の中央付近に位置する。

現地表面からローム層までの深度は約 65cm であった。両トレンチともに土中は強い撹乱を受けているが、南側の2トレンチでは特に強い撹乱が見られる。現在の本地点は北から南方向へやや傾斜が見られる程度であるが、調査による土層観察の結果、南側2トレンチからは埋土と見られる層が厚く見られ、傾斜解消のための盛土が行われたことがうかがえた。このことから、過去の本地点は現在より北から南への傾斜が大きかったことが推定される。

(3) 基本土層

本地点の基本土層は、第I層~第V層に分けられる。第I層は表土であり、砂利を多く含む。第II層の暗褐色土層は現代の撹乱が多く見られる。第IIII層は褐色ローム層である。しまり、粘性はともにややある。第IV層は水分を多く含み、粘性をもってロームブロックを少量含む。第V層はローム層である。

(4) 検出された遺構

本地点南側に設置した2トレンチ内で、土坑3基を確認した。いずれも激しい撹乱を受けており、土坑内から検出した遺物はビニールや針金など現代のものがほとんどである。これは、本地点を平坦にする目的で行われた盛土・埋土の影響と思われる。なお、土坑内の撹乱土を排除してさらに掘削を続けたところ、地表面から約150cmの位置で湧水が生じた。

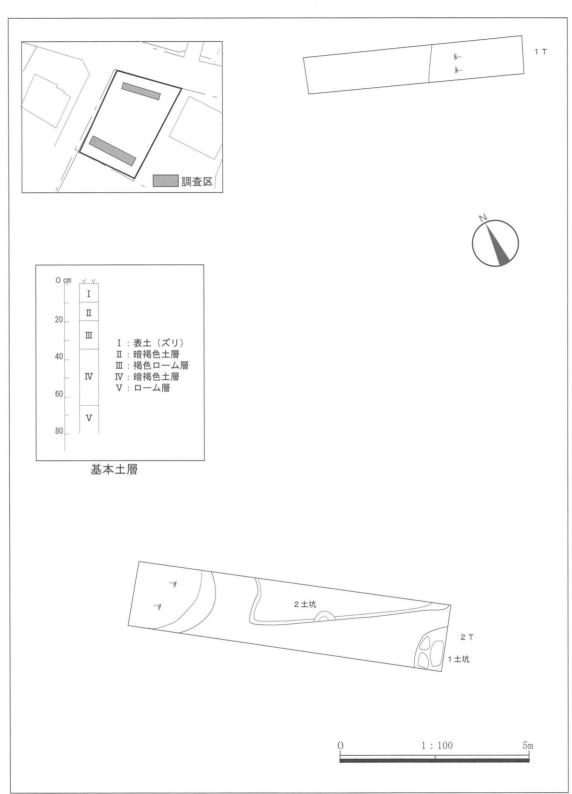
(5) 出土遺物

本地点では縄文から近世まで、幅広い年代の遺物が確認された。本地点で確認した遺物はいずれも特定の層から見られたものではなく、表土排除中あるいは人力でトレンチを掘り下げる過程で見られた。発見の経緯から、過去の盛土や撹乱の際に混入したものと思われる。小規模な破片が多く、接合できた個体は少ない。また、現代の撹乱に伴うビニール・針金などの遺物が見られた。

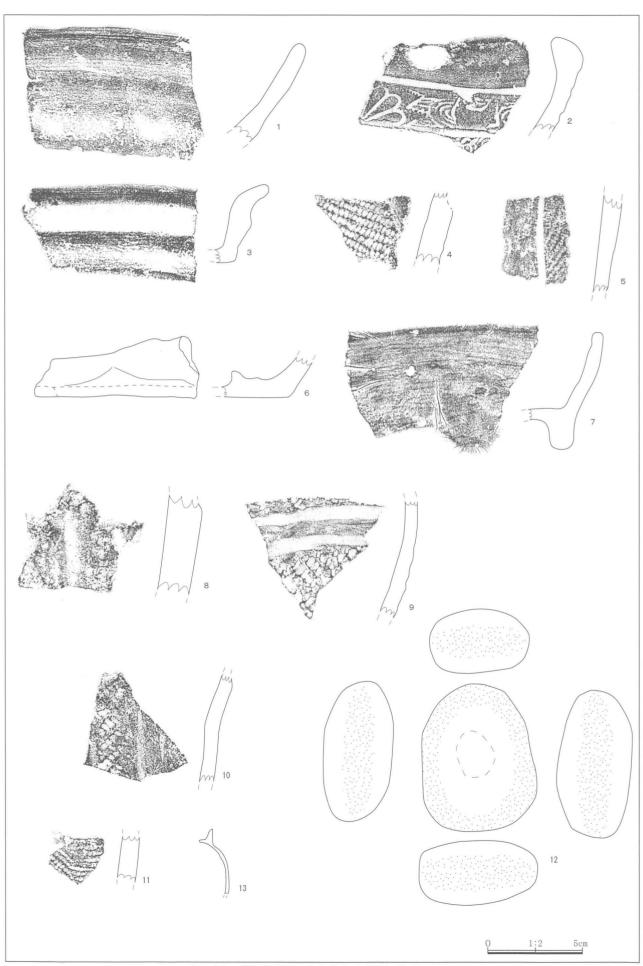
(6) まとめ

本地点は現在、平坦な地形となっているが、土中及び土層断面の観察から、従前は北から南へ傾斜していたこと、その傾斜を解消するために盛土や埋土が過去に行われたことが確認できた。盛土・埋土と思われる層からは現代の遺物(ビニールなど)が見られ、また、確認した遺構の中にも同様に現代の遺物が多く含まれていた。

これらの状況から、本地点においては近代以降に傾斜解消を目的とする整地が行われ、その際に掘削を行ったことで土坑が形成され、同時に本地点へ強い撹乱を与えたことが推定される。今回の調査では住居跡やそれに伴う遺構など、保存の対象となる遺構や遺物は確認できず、また、土中は既に人為的な強い撹乱を受けていることから、本地点における開発行為により埋蔵文化財への影響はないものと判断した。

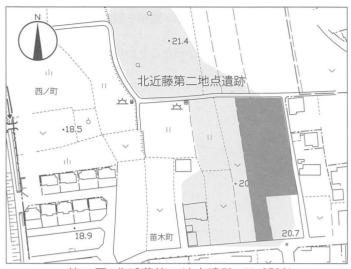


第5図 咄戸沼遺跡トレンチ配置図 (1:100) 、基本土層 (1:20)



第6図 咄戸沼遺跡 出土遺物実測図 (1:2)

2. 北近藤第二地点遺跡(平成26地点)



第7図 北近藤第二地点遺跡 (1:2500)

所 在 地 館林市苗木町字北近藤

2578番6、2578番7、

2578番42

調査原因 その他建物

調査期間 平成26年8月1日~

8月26日

調査面積 約 180 m²

(1) 遺跡と周辺の環境

北近藤第二地点遺跡は市街地の西方、東 武伊勢崎線館林駅から西に約3kmの市街 地郊外に位置し、遺跡南部には国道354号 線が通る。遺跡範囲北部は工業地域及び住 宅地、南部は耕作地としての利用が主となっている。本遺跡における発掘調査の実績 はこれまでにないが、周辺の遺跡からは多くの遺構・遺物が検出されている。

特に、本遺跡東部に位置する北近藤第一地点遺跡や、本遺跡南部に位置する南近藤遺跡ではこれまでに複数回の調査が実施され、ともに古墳時代後期を主とする多数の住居跡が確認されている。発掘調査の成果から、距離的・時期的に近接するこれらの遺跡を含む大規模な集落がこの地域に存在していたことがわかっている。

今回調査が行われた北近藤第二地点遺跡(平 26 地点)は南近藤遺跡の北約 100m の場所に位置していることから、周辺遺跡と近接する時代の遺構・遺物の検出が想定されて調査が行われた。

(2)調査の概要

北近藤第二地点遺跡(平 26 地点)の調査は、工事予定区域の地形に合わせて東西に3本、南北に1本のトレンチを設定した。土木重機により表土を排除し、その後、土層断面の観察を行いながら人力で関東ローム層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。平 26 地点は遺跡範囲南端にあたる。

本地点の現地表面は耕作士であった。地表面から 20cm ほど掘り下げると、ローム層に到達した。本地点では東から西、北から南へ、ともにやや傾斜が見られる。

(3)基本土層

本地点の基本土層は、第I 層と第II 層に分けられる。第I 層は表土であり、耕作土である。厚さは約20cm で、調査区全面に広がる。第II 層はローム層である。明褐色を呈し、こちらも調査区全面に広がる。

第Ⅱ層ローム層の土層断面を観察したところ、各トレンチともに平坦になっている様子が見られた。第Ⅰ層が耕作土であることから、従前の第Ⅱ層ローム層上部及び過去にその上面に存在していた層は耕作やそれに伴う整地等による影響を受けて消失し、平坦な現在の層序を形成したものと考えられる。

(4)検出した遺構

各トレンチ内を人力で精査した結果、溝2条、土坑11基、井戸1基を確認した。また、2トレンチ内では正方形状に掘り込まれた、建物跡と推定される遺構が確認された。

土坑は調査地内各所で確認された。深さは表土より60~80cm、形状は不整形、遺物を伴わないものが多い。耕作の痕跡、または植物の根の痕と考えられる。溝は3トレンチ及び4トレンチで検出し、深さは表土より約130cm、遺物は伴わなかった。いずれも性格は不明である。井戸は1トレンチの東で検出した。1トレンチ床面より掘削したところ、約250cmの位置で湧水を確認した。

建物跡と見られる遺構は2トレンチ中央付近で検出した。4層の堆積から成り、それらはレンズ状に堆積する。トレンチ床面から掘り下げ、70cmの位置でハードロームに達した。遺構内からは近代以降と思われる磁器片が確認できた。遺構中央付近にはピットが集中して見られたが、柱穴とは判断できず、また、炉など生活に関する遺構も見られなかったため、その性格は不明である。

(5) 出土した遺物

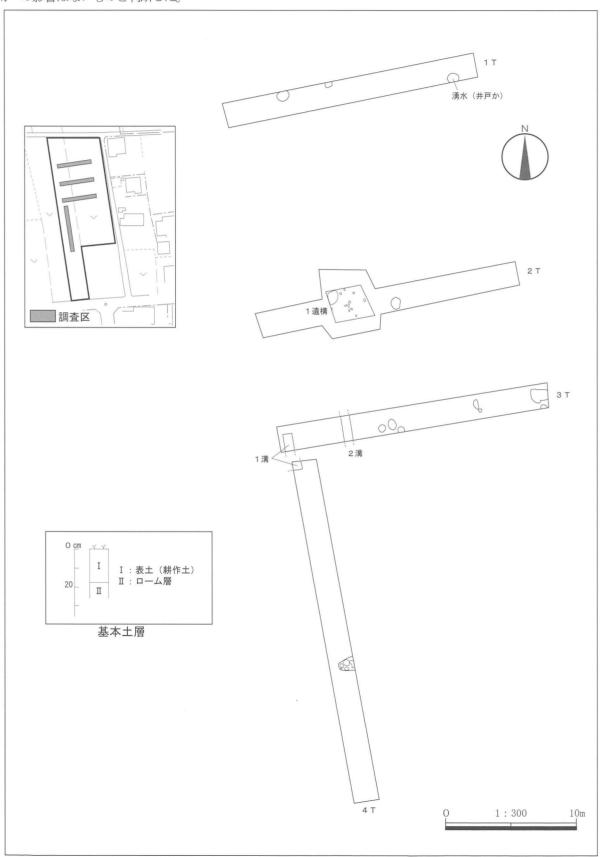
縄文土器片、磁器片が主に確認された。いずれも確認量は少量であり、元の器種や性格を明らかにするには至っていない。これらは耕作に伴う影響を受けていると思われ、特定の地点・層より遺物を確認することはできない。また、表土・覆土排除の際に見られたものが多い。

2トレンチ内で確認された建物跡と思われる遺構内からは磁器片が見られた。これらは近代以降のものと思われる。元は同一個体と思われるが、いずれも細かい破片となっており、従前の形状を復元するには至らなかった。

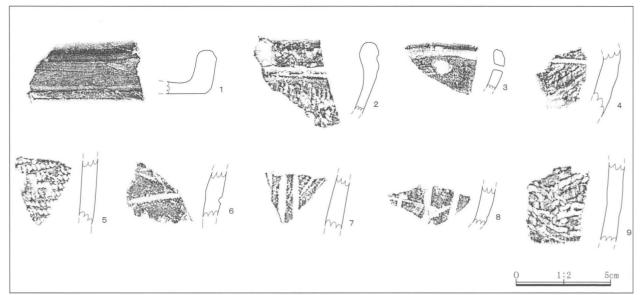
(6) まとめ

本地点では土坑や溝、井戸、建物跡と推定される遺構など、各種の遺構が確認された。耕作に伴うと考えられるものも多く、その性格を示す遺物もないため、性格が明らかでないものが多い。土層の堆積状況からは耕作やそれに伴う整地等によって本地点が大きな影響を受けたことが確認できた。遺構・遺物を包含していた層は耕作等により既に消失したと考えられる。

今回の調査では本地点では保存の対象となる遺構・遺物は確認できなかったことから、開発行為による埋蔵文化 財への影響はないものと判断した。



第8図 北近藤第二地点遺跡トレンチ配置図 (1:300) 、基本土層 (1:20)



第9図 北近藤第二地点遺跡 出土遺物実測図 (1:2)

3. 笹原遺跡 (平成26地点)



第10図 笹原遺跡 (1:2500)

所 在 地 館林市堀工町字法正谷

1857番1

調査原因 個人住宅

調査期間 平成27年1月9日~

1月25日

調査面積 約98 ㎡

(1)遺跡と周辺の環境

笹原遺跡は市街地南部、邑楽・館林台地の南辺にあり、県指定天然記念物「茂林寺沼及び低地湿原」(以下、茂林寺沼湿原)の北側に位置する。周辺の舌状台地の斜面にかけて広がり、周辺では近年、市街地化・宅地化が進んでいる。

同遺跡ではこれまでに複数回の発掘調査が実施されている。特に、道路改良工事に伴う平成9年度に行われた調査では縄文時代の遺物が大量に出土した。これまで

の調査では旧石器時代から縄文時代後期にかけての遺物が多く見られているが、それらに伴う住居跡等の遺構は確認されていない。

(2)調査の概要

笹原遺跡(平 26 地点)の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ東西南北に4本のトレンチを設定した。土木 重機により表土を排除し、その後、土層断面の観察を行ないつつ人力で関東ローム層まで掘り下げ、遺構・遺物の検 出を行なった。平 26 地点は遺跡範囲南端にあたり、地点東側は茂林寺沼湿原に接する。

本地点は北から南へ小さく、西から東に大きく傾斜する。これは遺跡を含む周辺地域自体が茂林寺沼湿原に向かって標高が下がる状況と一致する。調査地点西側に設置した1・2トレンチの西側の一部ではローム層が確認できるものの、両トレンチともに中央付近で土層の大きな落ち込みが断面に見られ、これより東側ではローム層を確認できなかった。

(3)基本土層

本地点の基本土層は、第I 層~第IV層に分けられる。第I 層は表土であり、耕作土である。本地点全面で見られ、厚みに大きな差は見られない。第II層、第IIII層は下部に至るほど黒色が強くなり、それに伴い含水量も増す傾向にある。第IV層はローム粒をやや含む。

第Ⅲ層以下は地点により厚みに差が見られる。特に調査地東側の3・4トレンチなど、調査区東側に至ると第Ⅲ 層以下が厚くなる傾向にある。これらの層は湿原に由来する層と推定される。

(4) 検出した遺構

トレンチ内を人力で精査した結果、土坑7基、溝1条、井戸1基が確認した。遺構が確認された場所は本地点西側の1・2トレンチにやや偏る傾向にある。東側で遺構が確認できたのは4トレンチに土坑2基、3トレンチは井戸1基のみである。今回の調査では住居や、それに伴う遺構は確認できなかった。

確認した土坑の中には、埋土やビニール等の遺物が含まれ現代の撹乱と判断できるものや、根などの残存物やその形状から耕作の影響と思われるものが見られた。また、1・2トレンチの東側では遺物が比較的多く確認されたが、土中の水分が多く、水の流れの痕跡が見られた地点であることから、何らかの水の影響によって集まった可能性が考えられる。

井戸は3トレンチ西端で確認された。確認面から掘り下げたところ、表土より約1.1mの位置で湧水を確認した。 湧水を確認した層は泥炭となっており、湿原を構成する層であると思われる。

(5) 出土した遺物

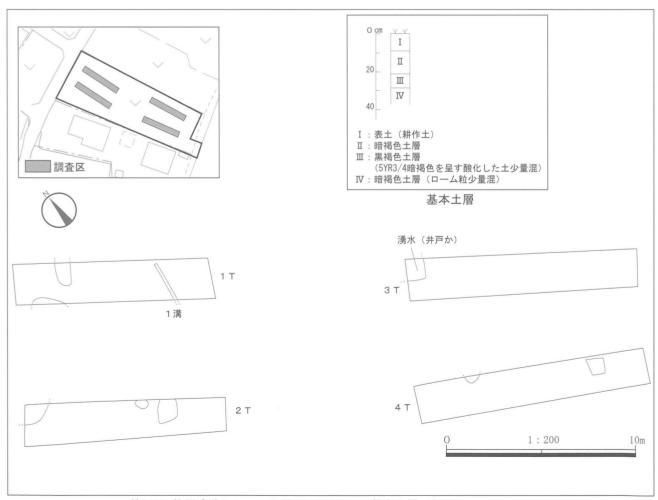
確認された遺物は縄文土器片を中心に、土師器片や磁器片が見られたが、その数は本地点の調査面積に比して少量といえる。特定の遺物集中箇所は見られていない。一部、勝坂式と見られる縄文土器片が見られるほか、早期と思われる破片も見られた。それらの器種や詳細は明らかでない。

確認できた遺物はその出土状況から、本地点内及び周辺の水の流れによる影響を受けたものと思われる。

(6) まとめ

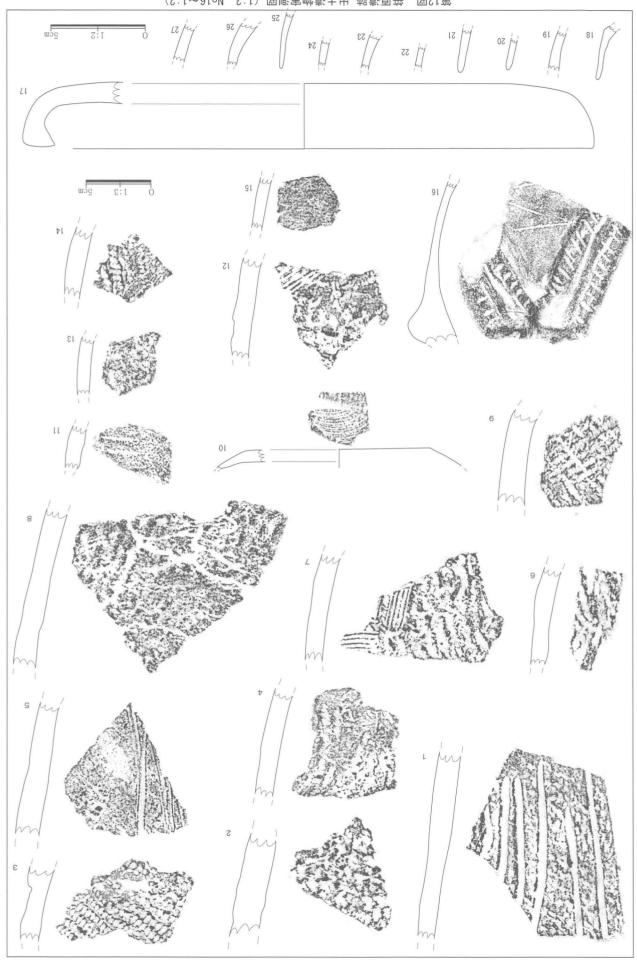
本地点での調査では、茂林寺沼湿原に向かって土地が傾斜している様子を明確に見ることが出来たが、住居やそれに関連する遺構等の確認には至らなかった。茂林寺沼湿原の範囲が過去においては現在より広範であったことは都市計画図等の資料からも確認することができるが、今回設置したトレンチ内の様子やその断面からは、本地点が過去は湿原とその周縁部であったことがうかがえた。縄文時代の前期や中期と思われる土器片が見られたが、いずれも小型の破片が主である。耕作や、水の流れの影響によって運ばれたものである可能性が考えられる。

土中の観察から、本地点の大部分は人が生活を営むには不都合な環境であったと思われ、今回の調査でも保存の対象とする遺構・遺物を確認するには至らなかった。そのため、本地点における開発行為について埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第11図 笹原遺跡トレンチ配置図 (1:200) 、基本土層 (1:20)

(2:1~8foN , 8:1) 図順実献畫土出 超畫甬普 図St 第



写真図版

咄戸沼遺跡(平26地点)



1-1 調査地全景



1-2 土木重機による掘削



1-3 1 T (東から)



1-4 2 T (東から)



1-5 2 T (西から)

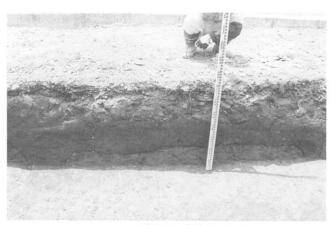


1-6 2 T 2 土坑 (西から)

(写真図版2)



2-1 1 T断面(北から)



2-2 2 T断面(北から)



2-3 2 T断面② (北から)

北近藤第二地点遺跡(平26地点)



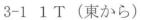
2-4 調査地全景



2-5 土木重機による掘削

(写真図版3)







3-2 2 T (東から)



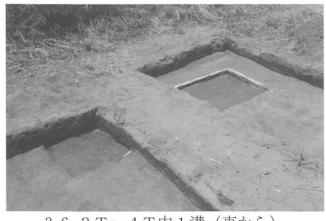
3-3 3 T (東から)



3-4 4 T (南から)



3-5 2 T内遺構 (南から)



3-6 3 T~4 T内1溝(東から)



3-7 3 T内 2 溝 (南から)

(写真図版4)



4-1 3 T断面 (南から)



4-2 4 T断面 (東から)



4-3 2 T遺構内断面(北から)

笹原遺跡(平26地点)



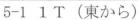
4-4 調査地全景



4-5 土木重機による掘削

(写真図版5)







5-2 1T (西から)



5-3 2 T (西から)



5-4 3 T (西から)



5-5 4 T (西から)



5-6 1 T内1溝(北から)



5-7 3 T内井戸 (南から)

(写真図版6)



6-1 1 T 断面全体 (東から)



6-2 3 T断面全体 (東から)



6-3 1 T断面 (南から)



6-4 2 T断面 (南から)



6-5 3 T 断面 (南から)

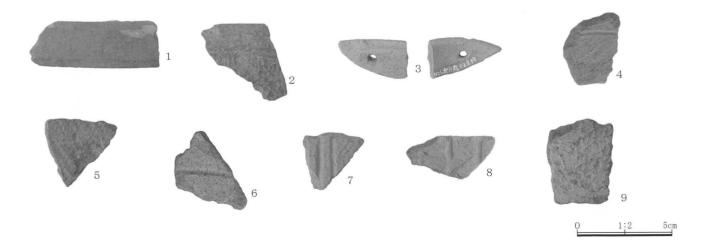


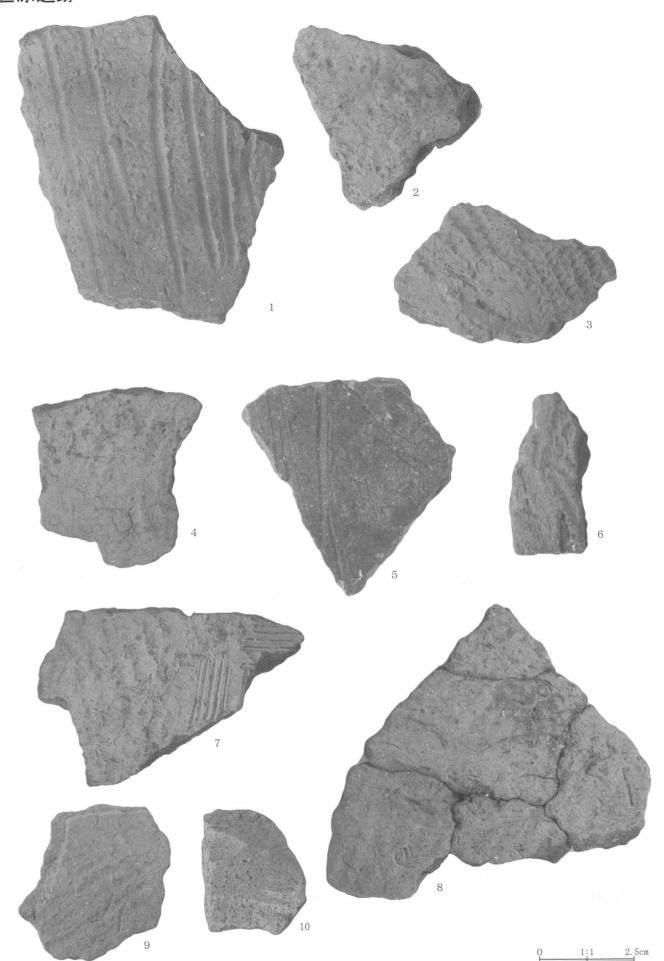
6-6 4 T断面 (南から)

咄戸沼遺跡

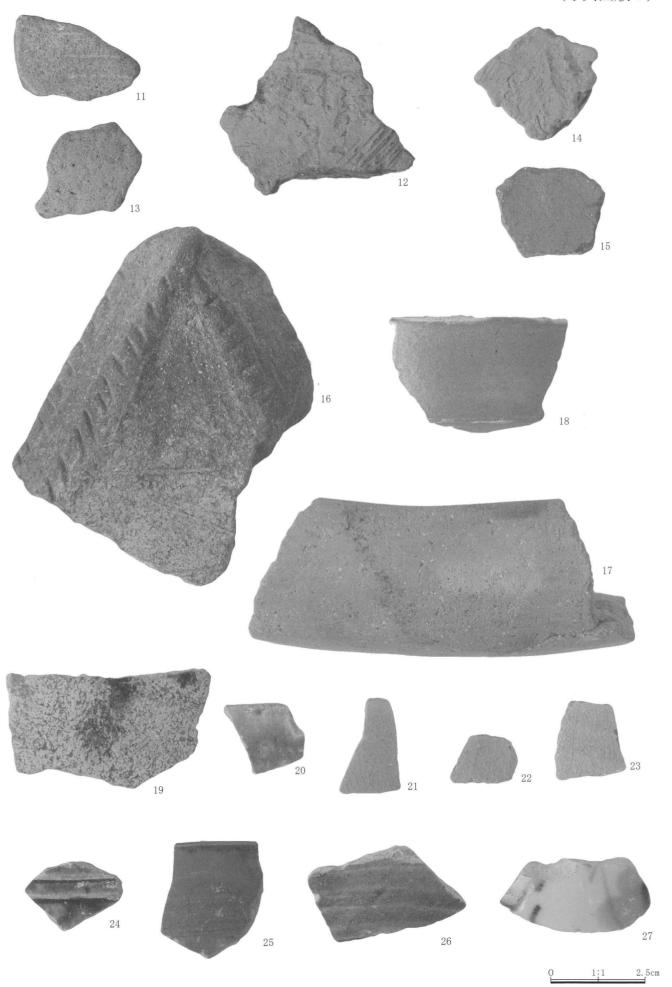


北近藤第二地点遺跡





(写真図版9)



ふ り が な	たてばやししない	ハいせきに	はっくつち	っょうさほ	うこくしょ							
書名	館林市內遺跡発掘調査報告書											
副書名	平成26年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 巻 次 ――――											
シリーズ名	館林市埋蔵文化原	財発掘調査	シリーズ 番 号	第52集								
編集者名	奈良 純一	金子陽位	編 集 機 関	館林市教	林市教育委員会							
編集機関所在地	〒374-8501 群馬県館林市城町1番1号											
発 行 年 月 日	2015 (平成27) 年 3 月 31 日											
市町村コード	102075											
所収遺跡	所 在 地	遺跡番号	北緯	東経	調査	近期間	調査面積	調査原因				
咄戸沼遺跡	堀工町	109	361333	1393216	20140617~	~20140621	約24 m²	個人住宅				
北近藤第二地点遺跡	苗木町	92	361351	1392951	20140801~	~20140826	約180㎡	その他建物				
笹原遺跡	堀工町	101	361345	1393147	20150109~	~20150125	約98㎡	個人住宅				
遺跡名	種別	時代		主	な遺構	主な遺	貴物	特記事項				
咄戸沼遺跡	散布地	縄文		土坑 3 基		縄文土器片	、磁器片	慎重工事				
北近藤第二地点遺跡	散布地	時代不明			基・溝2条・ 遺構1ヶ所・ 基	縄文土器片	、磁器片	慎重工事				
笹原遺跡	散布地	縄文・平安		土坑7基・溝1条・ 井戸1基		縄文土器片、 磁器片	土師器片、	慎重工事				

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第52集

館林市内遺跡発掘調査報告書

ー平成26年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査ー

編集·発行 館林市教育委員会 文化振興課 文化財係 (館林市文化会館内)

〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号 電話0276-74-4111

印 刷 上每印刷工業株式会社発行年月日 平成27年3月31日

©Tatebayashi City Board of Education 2015 Printed in Japan



文化財愛護シンボルマーク

http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/